東京都江戸東京博物館紀要　第４号　2014年３月
Bulletin of the Edo-Tokyo Museum, No. 4, P. 149－167, March, 2014

企画展「雑誌に見る東京の20世紀－館蔵資料紹介－」実施報告

行　吉　正　一*

目　次

はじめに
１．展覧会開催の背景
　１）博物館資料としての雑誌
　２）減少している雑誌という印刷媒体
　３）雑誌と都市
２．展覧会の構成
　１）プロローグ「雑誌の廃刊」
　２）第１章　明治時代
　３）第２章　大正時代
　４）第３章　昭和・平成時代
　５）第４章　トピックス
３．展覧会概要
おわりに

キーワード　博物館資料　雑誌　東京

はじめに

本稿は、2013年（平成25）２月９日（土）から３月10日（日）まで開催した、企画展「雑誌に見る東京の20世紀－館蔵資料紹介－」の実施報告である。

本展覧会は、近現代の東京の歴史を館蔵の雑誌、約150点を通して紹介すると同時に、雑誌という媒体の特徴や歴史についても紹介したものである。なお、展覧会名に「20世紀」とあるが、扱った年代は20世紀の前後も含めた。

*東京都江戸東京博物館学芸員

１．展覧会開催の背景

１）博物館資料としての雑誌

出版物の中でも、雑誌は、最新情報を継続的に提供する出版物であり、その時代の社会状況を直接反映する「鏡」のようなものということができる。その時代の人々の必要とする最新の情報を、週単位、月単位という短い期間で提供する媒体であるため、単行本に比べても、その時代の様相がより直接的に現れるのである。

当館では、このような雑誌を含め、図書資料を東京の社会を語る貴重な歴史資料としてとらえており、当館における標本資料・映像音響資料とまったく同等の扱いをしている。したがって、当館における図書資料は、一般の図書館とは異なる扱い方がされている。

たとえば、一般の図書館などでは保存されにくい、図書についている箱やカバー、帯なども、その時代の出版文化を反映する歴史資料と考え、廃棄せず、そのままの形態で保管している。また、雑誌についても、数冊をまとめて製本する合本処理はせず、一冊単位で保存をし、発刊された当時の形態を残すように努めている。図書、雑誌を保護するため、着脱可能なポリプロピレンのカバーを使用し、請求記号ラベルもそのカバーの上から貼り、本体には直接貼らないようにしている。

このような扱いのもと、当館では、現在、約228,000点の図書資料を収蔵し、そのうち、逐次刊行物（雑誌）は、約113,000点にのぼる。（2013年10月現在）

この展覧会の背景には、このような当館特有の図書資料への考え、扱いがあるのである。この展覧会開催の背景として、まず第一に、そのことをあげなければならない。

２）減少している雑誌という印刷媒体

先に述べたように、雑誌は、時代が必要とする情報を定期的に提供する出版物である。したがって、その時代の社会状況を反映する「鏡」のようなものということができる。しかし、時代は常に変化し、その雑誌の提供する情報が、時代に必要とされなくなると、その雑誌は、次第に発行部数を減らし、ついには廃刊してゆく。また、それと同時に、新しい時代に即した内容を提供する雑誌が、創刊され、雑誌は、常に激しい新陳代謝を行いながら刊行されてきたということができる。しかし、21世紀に入り、インターネットの普及により、雑誌という印刷媒体そのものが、社会の中での機能を低下させてきている。最新の情報が、インターネット環境の中で発信され、雑誌よりも早く、また、安価に入手できるようになり、印刷媒体である雑誌そのものが、社会の中で機能しなくなってきたのである。

日本において最初に発刊された雑誌は､「西洋雑誌」という西欧事情を紹介する雑誌といわれているが、その創刊（1867年（慶応３））から、一世紀半もたたないうちに、雑誌という印刷媒体が減少し始めたことになる。

雑誌が減少してきたということは、雑誌そのものが、ある時代に特有なものであることを示しており、逆に、雑誌の歴史的価値が高くなってきているということができる。

当館が、雑誌を歴史資料としてとらえ収集を始めたころ、雑誌という印刷媒体そのものが、減少して

ゆくとは、夢にも思わなかったが、雑誌が減少しているという状況の中で、雑誌の特徴をあらためて見直すのも、本展覧会の目的の一つであった。

３）雑誌と都市

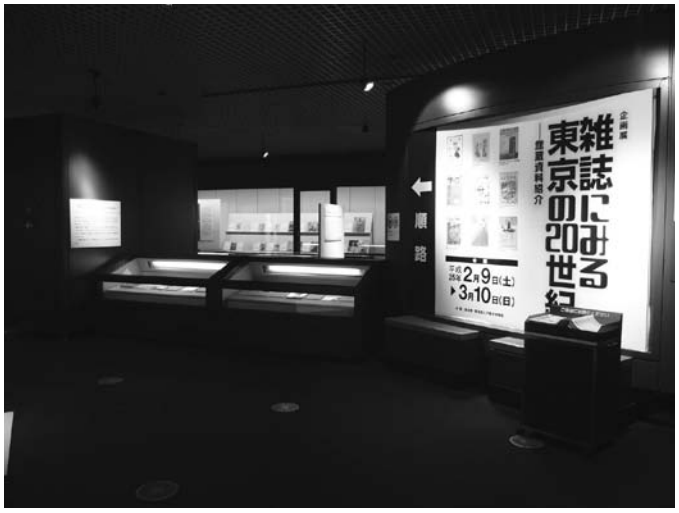
雑誌によって東京という都市の歴史を紹介する展覧会を開催した背景には、雑誌という近代の印刷媒体が、東京など大都市で発行され、消費されるという強い傾向をもつものであるからでもある。過去の情報をまとめ、伝えるというより、最先端の情報をまず提供することを主目的にする雑誌は、時代の最先端の情報を有する大都市で生まれ、消費される。近代になると日本は、様ざまな社会的機能が、東京に一局集中した国家となる。東京に中央政府ができ、最先端の情報は、東京に集まり、東京から発信される。政治的な情報に加え、社会、文化的な情報も、東京から生まれ、東京から発信され、地方に伝達される。雑誌の伝達する情報は、東京や大都市の情報であり、多くの雑誌は、大都市の情報を掲載することになる。したがって都市東京の歴史を考える際、雑誌に掲載された情報は、必要不可欠なものとなるのである。

以上のような理由により、館蔵資料としての雑誌の企画展を開催した。

２．展覧会の構成

１）プロローグ「雑誌の廃刊」

展覧会の最初の部分では、この企画展開催のきっかけでもある、雑誌の廃刊をとりあげた。長年、発刊されていた雑誌の廃刊は、しばしばマスコミによってもとりあげられ、雑誌というメディアが、衰退していることが話題になっているが、プロローグでは、廃刊された雑誌のいくつかを展示した。



【写真１】会場写真① プロローグ「雑誌の廃刊」

雑誌の創刊号は、誌面に「創刊号」などと記載されるが、雑誌が廃刊される場合、次号を出す予定であったが、結局出せず、その号が、結果的に廃刊号になる場合もあり、廃刊号などという記載のある雑誌は少ない。雑誌の中には、いつ廃刊されたかわからないものも数多くある。プロローグでは、廃刊されたことが確認できる代表的な雑誌を展示した。多くの人々が知っている雑誌を選び、そのような雑誌でさえも廃刊していることを示し、雑誌が減少しつつあることを示した。

・「ぴあ（首都圏版）」（ぴあ株式会社／発行　1972年（昭和47）～ 2011年（平成23））

文化情報誌「ぴあ」（首都圏版）が、インターネットの発達により、発行部数の減少に歯止めがかからず39年の歴史に幕を下ろした。「ぴあ」は、大学生が創刊したもので、それは、学生起業の走りでもあった。「できるだけ客観的で完全な“情報のインデックス”」であることを目指したことが時代のニーズをとらえ、特に若者達に歓迎された。映画や演劇、展覧会が、読書と並んで自我形成の重要な手段であった時代だからこその雑誌だったのかもしれない。現在は、インターネット版ぴあがある。

・「朝日ジャーナル」（朝日新聞社／発行　1959年（昭和34）～ 1992年（平成４））

「報道・解説・評論」を３本の柱として、週刊誌ブームの渦中の1959年（昭和34）に創刊された。ベトナム反戦運動や安保闘争などの左翼運動が盛んだった時代を背景に、左翼的思想を支持する当時の「全共闘世代」、「団塊の世代」によく購読されていた。「右手にジャーナル（「朝日ジャーナル」）、左手にマガジン（「週刊少年マガジン」）」とも言われた。しかし、1970年代に入ると学生運動は下火になり、発行部数は減少。1984年（昭和59）から筑紫哲也が編集長となり、話題となり、また、1990年（平成２）から下村満子が就任して誌面を刷新したが、発行部数は低迷を続け、廃刊となった。

・「フォーカス」（新潮社／発行　1981年（昭和56）～ 2001年（平成13））

写真週刊誌の草分けで、写真を前面に押し出した、新しいジャーナリズムのスタイルを確立した。創刊当初は、有名写真家を使った芸術性の高い雑誌を目指したが、発行部数は伸びず、有名人のスキャンダルを取上げる週刊誌へと変貌し、成功を収めた。類似の雑誌も出版され、次第に読者からも飽きられるようにもなり、部数を減らして、廃刊した。

・「主婦の友」（主婦の友社／発行　1917年（大正6年）～ 2008年（平成20））

「家庭の幸福と女性の地位の向上」という創業者、石川武美（1887－1961）の掲げた理念のもと、91年間にわたって刊行された長寿の雑誌であった。「主婦」の生活に根ざした知恵や教養を授ける、生活技術啓蒙誌であり、大衆層に向けた雑誌であった。婦人誌の付録に初めて家計簿を付けた雑誌としても知られる。しかし、専業主婦そのものが減少し、既婚女性であることを強調する「主婦」という言葉自体に違和感が感じられる時代となり、雑誌の理念と時代の乖離が大きくなり、廃刊に至った。

２）第１章　明治時代

第１章から第３章までは、時代順の展示を行った。

第１章では、明治時代を取り扱った。明治10年代までの雑誌は、西欧の事情を紹介するもの、政治思想を展開するもの、また、医学、教育、経済、法律、宗教など、各分野の最新情報を提供するものなどが多い。明治新政府が成立し、時代が新しくなり、個人や団体が啓蒙活動のために出版したものである。また、活版印刷や石版印刷などの新しい印刷技術が導入され、用紙も、和紙から洋紙へと変化していき、形態も、和綴じから、洋装へと新しくなっていった。明治20年代になると、雑誌の流通の環境が整ってくる。まず、明治20年から30年代にかけて、鉄道網が整備され、迅速に全国に雑誌が行き渡るようにな

る。また、第三種郵便物の制度が、1892年（明治25）に導入され、一定の条件を満たす雑誌は、安い郵送料で全国一律料金で配達されるようになる。さらに、雑誌の販売に当たり、出版社と書店の間を取り次ぐ、取次店も現われ（1890年（明治23）には、東京堂が創業される）、雑誌はますますその数を増やしていった。また、日本全国で出版されていた雑誌が、東京中心となったのも、明治20年代である。そのようななか、博文館が、1887年（明治20）創業され、1895年（明治28）に初の総合雑誌「太陽」を創刊するなど、明治時代を代表する大出版社となる。明治30年代には、学制も整い（1899年（明治32）中学校令改正、高等女学校令公布など）、読者の層も拡大される。1909年（明治42）には、実業之日本社が、同社発行の雑誌「婦人世界」において、書店が売れ残りを出版社に返品可能とする委託販売制を取り入れ、雑誌販売の新しい形を作り上げた。

このような状況をふまえ、第１章では、以下の様な雑誌を紹介した。

①「風俗画報」

雑誌における、西欧からの画像印刷技術の導入を示すものとして、「風俗画報」を選んだ。

江戸時代までは、出版物における画像の印刷は、木版であったが、近代に入り、画像印刷の様ざまな技術が、西欧から導入され、雑誌においても、それらの技術が貪欲に導入された。その結果、「画報」と称する雑誌が多数刊行されたが、「風俗画報」は、日本で最初に「画報」と名のった雑誌と言われている。当初は、銅版画、石版画が、ついで写真印刷が用いられ、数多くの画像が掲載された。

【写真２】会場写真②「風俗画報」の展示

明治時代前期のナショナリズムの風潮を反映して創刊されたもので、内容的には、江戸時代の風俗考証、東京新風俗の記録、日本全国の地方風俗の紹介という三つが主なものであり、江戸東京という地域に関する情報も多数掲載している。今では、明治時代の風俗を研究する上で、欠くことのできない雑誌となっている。また、帝国憲法が発布された1889年（明治22）から第一次世界大戦中の1916年（大正5）まで、27年の長期にわたって刊行されたことも、特出すべき点であろう。当館は、「風俗画報」全冊を所蔵しており、東京の歴史を示す資料を選択して展示した。

なお、誌名に「画報」とつく、ビジュアル雑誌は、第二次世界大戦前まで、数多く出版され、戦争関係の画報のほか、芸能、科学、少年少女、女性、娯楽などの分野で刊行された雑誌である。

②戦争を取り扱った博文館の戦争画報

1887年（明治20）、大橋佐平（1835－1901）によって創業された博文館は、明治時代を代表する出版社の一つである。出版事業に必要な洋紙会社、印刷所、取次会社、広告会社などの関連企業も立ち上げた、明治時代の大出版社である。多様な読者層ごとに様ざまな雑誌を発行し、のちにそれらを統合してゆくという方法で、常に雑誌を発刊しつづけ、総合雑誌の「太陽」はその代表的なものである。

日清戦争および日露戦争の戦況を報道する雑誌、「日清戦争実記」、「日露戦争実記」、「日露戦争写真画報」（「日露戦争実記」の定期増刊号として発行された）は、庶民の戦争への関心を駆り立て、多くの部数が刊行され、博文館飛躍の礎を築いた雑誌である。

「日清戦争実記」では、初めて網目写真版による写真を掲載し、「日露戦争実記」は、日本の雑誌で初めて平均10万部を発行した。作家の田山花袋（1872－1930）も「日露戦争実記」、「日露戦争写真画報」に従軍記者として記事を書いている。石版画や写真を数多く掲載し、戦況の速報と解説とによって多くの読者を獲得した。

一般に、戦争は、人々の関心を強くひく題材であり、雑誌は、常に戦争をとりあげた。戦争についての情報を、人々は雑誌から得、国家は、国威発揚の手段としても雑誌を利用したのである。

③芸術雑誌

博文館などの大出版社とは別に、商業主義的ではない雑誌も多く出版された。たとえば、西欧の芸術に強い刺激を受けた若い芸術家たちが、自分たちの芸術を社会に訴える手段として刊行した雑誌である。雑誌は、単行本に比べ、比較的少ない資本で、容易に出版できることから、若い芸術家たちは、雑誌という手段を利用したのである。日本近代の芸術史に残るような、様ざまな雑誌が発刊された。

元来、雑誌には、出版社の商業活動の面と、自分たちの主義主張を伝えようとする面があるが、明治時代、すでにその二つの面が表れていたのである。

ここでは、文芸雑誌の「ホトトギス」と、版画文芸雑誌の「方寸」をとりあげた。「ホトトギス」（ホトトギス発行所／発行）は、正岡子規の俳号「子規」（ホトトギスの意味）にちなんだもので、俳句雑誌として1897年（明治30）、愛媛県松山市で創刊され、21号から高浜虚子が東京で発行した。やがて、和歌、新体詩、小説、文芸批評、そして、美術を加えた文芸誌となり、夏目漱石の「吾輩は猫である」、「坊っちゃん」も掲載された。現在も、俳句雑誌として刊行されている。「方寸」（方寸社／発行）は、1907年（明治40）、石井柏亭，山本鼎，森田恒友が同人雑誌として創刊したもので、木版画、石版画など、多彩な版画作品を世に問うた雑誌である。美術関連記事だけでなく、詩や随筆なども掲載され、詩人の北原白秋や木下杢太郎も作品を寄せており、1911年（明治44）まで全35冊が刊行された。

このほかにも、芸術雑誌は、現在に至るまで、多くが発刊されており、芸術家たちの創作活動の基盤となっている。近代に入り、多くの芸術家は、東京に集まり、東京は、多くの芸術雑誌の発刊地ともなった。文芸誌の「早稲田文学」（早稲田文学社、1891年（明治24）創刊）、「白樺」（白樺社、1910年（明治43）創刊）、「三田文学」（三田文学会、1910年（明治43）創刊）などは代表的なものであるが、同人誌とよばれる文芸雑誌は、現在でも多数刊行されている。

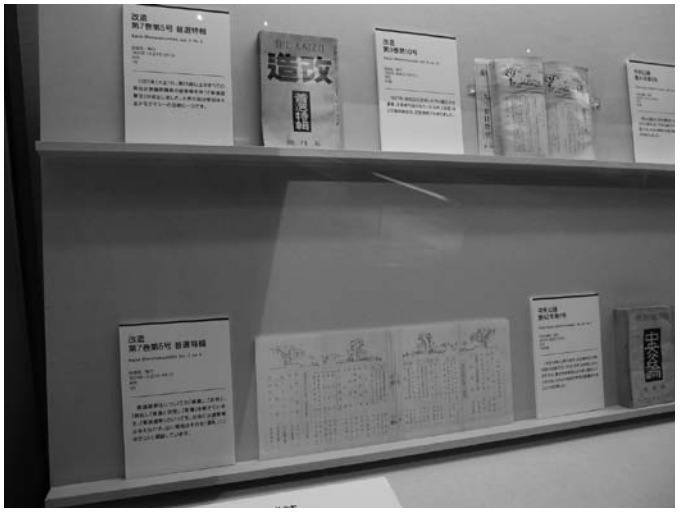
３）第２章　大正時代

第２章では、大正時代を扱った。大正時代の文化の特徴は、大衆文化の成立と発展にあったといえる。第一次世界大戦後になると、東京でも重化学工業化が進み、工場労働者の人口が増えてゆく。また、事務系の職場で働くサラリーマンや、職業婦人とよばれる女性も社会に進出し始める。このような動きを受け、雑誌をはじめ、新聞、ラジオなどのマスメディアが発達し、大衆文化が誕生したのである。また、大正デモクラシーと呼ばれる、政治、社会、文化面での民主主義化を求める運動も活発化し、民衆の社会的地位も次第に高まっていった。総合雑誌は、この大正デモクラシーの議論を活発化させた。また、様ざまな女性雑誌、児童雑誌が刊行され、女性や子供の人権向上運動に大きな役割を果たした。しかし、1923年（大正12）９月、関東大震災が発生し、東京は壊滅的な被害を被り、出版界も大きな打撃を受けた。そのため、廃刊した雑誌も数多くある。

第２章では、大正時代の社会を反映した、以下の様な雑誌を展示した。

①総合雑誌

総合雑誌とは、政治社会についての評論を掲載する雑誌のことである。昭和初期までは、「高級雑誌」という名称で呼ばれていたように、世論を形成する役割を強く持つ雑誌である。総合雑誌は、したがって、時代の大きな転換期に活発に発刊される傾向を持つ。大正デモクラシーの言論をリードしたのは、「中央公論」（中央公論社、1887年（明治20）創刊）と「改造」（改造社、1919年（大正８）創刊）だった。吉野作造の民本主義や美濃部達吉などの自由主義的な論文、山川均や河上肇などのマルクス主義的論文に多くの紙面を割き、大正デモクラシーを支えた。また、総合雑誌は、多くの優れた文芸作品を掲載していたことも見逃せない。大手の文芸雑誌がなかった当時、総合雑誌は、作品発表の重要な舞台だったのである。



【写真３】会場写真③「改造」の展示

ここでは、「中央公論」と「改造」を展示した。

②「青鞜」

女性文学者による青鞜社が出版した雑誌。1911年（明治44）から1916年（大正５）まで刊行された。平塚らいてう、伊藤野枝、野上弥生子、与謝野晶子などが作品を載せている。「青鞜」というと、女性解放運動の雑誌というイメージがあるが、当初の「青鞜」は、小説、詩歌中心の文芸雑誌であった。しかし女性の才能を伸ばすためには、まず旧道徳から女性を解放する必要があるという考えから、次第に、

女性解放運動を展開していった。

③「赤い鳥」

1918年（大正７）に創刊され､1936年（昭和11）まで続いた児童文学雑誌。芸術性の豊かな創作童話、童謡の確立をめざし、児童文学者の鈴木三重吉（1882－1936）が創刊した。森鷗外、島崎藤村、芥川龍之介、北原白秋など、多くの文学者の賛同を得、大正デモクラシーの風潮を反映し、児童尊重や教養主義的傾向を示す多くの作品が掲載された。また､表紙絵や挿絵も美しく､児童の綴り方（作文)､自由詩、自由画の指導も行なわれ､「赤い鳥」は、大正時代の児童文化運動において重要な役割を果たした。

また､「赤い鳥」のほか､「金の船｣､「童話｣､「コドモノクニ」など多くの童話雑誌が創刊された。

④　関東大震災

1923年（大正12)、９月１日午前11時58分、相模湾を震源とするマグニチュード7.9の大地震が東京をはじめ関東地方を襲った。昼食時のため発生した火災により被害は拡大し、７万人もの犠牲者が出た。東京の出版社や印刷会社は大きな被害を受け、当時すでに多くの出版社が東京に集まっていたので、日本の出版界は壊滅したと思われた。しかし、復興は意外と早く、震災翌月に10月号を発刊する雑誌もあった。テレビもラジオも無かった当時、雑誌は、災害を報道する貴重なメディアだったのである。ただ、関東大震災を機に廃刊した雑誌も数多くあった。

【写真４】会場写真④ 関東大震災を特集した雑誌の展示

ここでは、関東大震災を特集した様ざまな雑誌を展示した。

４）第３章　昭和・平成時代

第３章では、昭和・平成時代を取り扱った。

昭和時代は、金融恐慌で幕を開け、戦争へと進んでいった時代である。昭和初期には、大衆娯楽誌が数多く刊行され、不況の中、人々が、雑誌に娯楽を求めたことがわかる。しかし、戦時色が強くなると、言論統制は徹底され、雑誌の統廃合も強制され、雑誌は、完全に戦時体制に組み込まれていった。敗戦後は、軍国主義に代わった民主主義のもと社会が復興してゆき、多くの種類の雑誌が創刊され、自由と活字に飢えた人々の心をいやした。たとえば大衆的なカストリ雑誌や､「新生」（新生社、1945年（昭和20）創刊）や「世界」（岩波書店、1945年（昭和20）創刊）など、民主主義による新しい社会を目指す総合雑誌などである。やがて、高度経済成長期になると、サラリーマンを対象とした週刊誌ブームが出

現する。また、地域の生活文化情報を提供する地域情報誌やタウン誌も発行され、雑誌は最盛期を迎えた。しかし、平成時代に入り、インターネットなどが急速に普及してくると、雑誌は、発行部数を次第に減らし、廃刊してゆくものもでてきた。

第３章では、昭和・平成時代の社会を反映した、以下の様な雑誌を展示した。

①戦時下の雑誌

戦前戦中の期間は、雑誌にとっては暗黒時代だった。厳しい検閲のもと、左翼機関雑誌は次々と姿を消し、自由主義的雑誌も出版活動を制限された。さらに、すべての雑誌が、強制的に整理統合されて、雑誌は戦争の宣伝媒体（プロパガンダ）となってゆく。政府は、戦時体制強化のため、みずから「週報」や「写真週報」を出版し、海外向けには「FRONT」を出版した。人々は、雑誌に戦況の報道と娯楽を求め、雑誌の売り上げは逆に急増し、出版社も読者も戦争を支援する体制に入っていった。

【写真５】会場写真⑤ 戦時下の雑誌の展示

明治政府は、出版物による言論統制法を明治時代初期から制定している。1869年（明治２）には、出版条例、1875年（明治８）には、新聞紙条例が発令され、以降、それぞれが改正され、出版法（1893年（明治26））では主に図書が、新聞紙法（1909年（明治42））では主に新聞・雑誌の言論統制が行われていた。戦時中は、それらに加え、出版物への厳しい統制があったのである。

このコーナーでは、様ざまな左翼雑誌、「週報」（印刷局、1936年（昭和11）創刊）、「写真週報」（内閣情報部（のち情報局）、1938年（昭和13）創刊）、「FRONT」（東方社、1942年（昭和17）創刊）などを展示した。

②カストリ雑誌

カストリ雑誌とは、第二次世界大戦敗戦後の数年間にわたって、数多く発行された大衆娯楽雑誌で、刺激の強い性風俗を売り物にしたものである。敗戦後の自由な言論活動を反映したものだが、性の商品化をもたらしたものでもあった。当局の取り締まりの対象になり、粗悪なものでもあったので、多くのものがすぐに廃刊していった。カストリ雑誌には、単に、性風俗が示されているだけでなく、敗戦後の様ざまな社会の様相が示されている。

ここでは、様ざまなカストリ雑誌を展示した。

③グラフ雑誌

絵や写真を中心としたグラフ雑誌は、すでに明治時代から、多くの「画報」として出版されていたが、グラフ雑誌の中でも、特に報道を目的とした大判の雑誌があり、「アサヒグラフ」（朝日新聞社、1923年（大正12）創刊）と「毎日グラフ」（毎日新聞社、1948年（昭和23）創刊）がその代表的なものである。政治、社会だけでなく、芸能やスポーツなどの親しみやすいテーマも扱い、人気を博したが、他の雑誌もビジュアル化し、テレビも普及してくると、それらの雑誌はその特性を失い、次々と廃刊されていった。

【写真６】会場写真⑥ グラフ雑誌の展示

ここでは、「アサヒグラフ」と「毎日グラフ」を展示し、そこに示された当時の東京の社会を示した。

④週刊誌

日本で最初の本格的な週刊誌は、1922年（大正11）に創刊された「週刊朝日」と「サンデー毎日」である。後にそれらの新聞社系とは異なる、出版社系週刊誌として新潮社が出した「週刊新潮」が、1956年（昭和31）に創刊され、週刊誌ブームが起る。週刊誌には、週ごとの記事がまとめて掲載されることから、毎日発行される新聞より、情報の核心を端的に得られるという利点があり、専門的、総合的なものから、大衆娯楽的なもの、また、女性向け、若者向けなど様ざまなものが創刊された。週刊誌は、多くの読者を獲得し、雑誌界においては有力な分野を占めるものとなっていった。

ここでは、「昭和」から「平成」への転換期にでた、昭和天皇崩御を特集した様ざまな週刊誌を展示した。

⑤タウン誌

特定地域の情報を提供する雑誌をタウン誌と言う。各地域の出版社が独自の取材をし、発売・配布も既存の流通網をとらず、地域の書店や飲食店などで発売・配布される。東京では1960年代ころから現れ始める。都市化により地域に対する意識が希薄になっていった時代、地域の人々が、失われた絆を取り戻すため、また、地域の歴史や文化を再認識するため、タウン誌を刊行したのである。なお、ここでは「タウン誌」という言葉を広く使い、地域の店舗の紹介をするＰＲ型（「銀座百点」、「日本橋」、「浅草」、「うえの」など）から、地域の歴史文化を再評価し、コミュニティを形成するもの（「地域雑誌　谷中・根津・千駄木」など）までを指すこととした。しかし、近年は、インターネットの普及により多くのタウン誌が廃刊されている。

当館は、東京のタウン誌を収集しており、それらのなかから、いくつかを展示した。

５）第４章　トピックス

第４章では、雑誌の特徴を示すような様ざまな雑誌を展示した。

①生きている雑誌（雑誌の変遷）

雑誌は、その時代が必要としている情報を提供するため刊行されるものである。しかし、時代は常に変化しており、その雑誌が提供する情報を時代に合わせなければ、雑誌は存続してゆかない。雑誌は、常に生き延びようとしている。時代に合わせるため、内容や形態を様ざまに変えながら発刊し続けようとするのである。同じ雑誌でも､時代により様ざまに姿を変える雑誌は､まるで｢生き物｣のようである。

ここでは、戦前、戦中、戦後を刊行し続けた「主婦の友」を選んで、その変化の様子を紹介した。戦前、婦人雑誌といえども、雑誌として存続するためには、戦争協力の姿勢を強めざるを得なかった。記事にも戦争賛美の記事が多く出る。しかし、敗戦後は一転、民主主義を謳歌する内容となり、その変わり身の早さには、驚かされる。実際、日本出版協会では、戦争中の出版社の戦争責任追及の声が高まり、講談社、新潮社、主婦之友社、旺文社など雑誌出版７社が指名して糾弾された。

②創刊号

創刊号は、その時代が必要とし始めた情報を先取りして刊行されるもので、創刊号には、その時代の社会状況が、端的に現れているといっていい。

ここでは、今から約半世紀前の1960年代、1970年代に刊行された創刊号を選んで展示をした。高度経済成長、公害、学生運動など、激動の時代であった。

【写真７】会場写真⑦ 創刊号の展示

このコーナーでは、当時の時代相を示す様ざまな種類の創刊号を展示した。それは、雑誌が本来もっている、セグメント性（読者の属性（性別、年齢、職業、興味関心など）を細分化し、その属性にターゲットを絞り発刊してゆく性質。したがって、実に様ざまな種類の雑誌が発刊されることになる。）を示すためでもある。

また、この時代は、雑誌の大型化、ビジュアル化が進んだ時代でもある。テレビの普及などもあり、雑誌は、読む雑誌から見る雑誌へと変化していった。また、その背景には、雑誌への「入り広告」の急増もある。「入り広告」とは、雑誌に掲載される他社の広告で、その雑誌を販売している会社にとっては大きな収入になる。大型化、ビジュアル化したほうが、この入り広告は入りやすく、いきおい、雑誌は大型化、ビジュアル化していったのである。

３．展覧会概要

（１）展覧会名

企画展「雑誌にみる東京の20世紀　－館蔵資料紹介－」

（２）主催

東京都　東京都江戸東京博物館

（３）会期

2013年（平成25）年２月９日（土）～ 2013年（平成25）３月10日（日）

開催日数26日

（４）開館時間

午前９時30分～午後５時30分（入館は閉館の30分まで）

（５）会場

東京都江戸東京博物館　常設展示室５階　第２企画展示室

（６）観覧料

① 一般　600円（団体480円）

② 大学・専門学校生　480円（団体380円）

③ 中学生（都外）・高校生・65歳以上　300円（団体240円）

④ 中学生（都内）・小学生以下　無料

（７）関連事業

① ミュージアムトーク　行吉正一

企画展「雑誌にみる東京の20世紀　－館蔵資料紹介－」展示解説

２月15日（金）午後４時～４時30分（展覧会会場）参加自由　無料

② えどはくカルチャー　行吉正一

企画展「雑誌にみる東京の20世紀　－館蔵資料紹介－」の見どころ

３月８日（金）午後２時～３時30分（会議室）事前申込　1,000円

おわりに

最後に、雑誌を含む図書資料の展示について思うことを記し、本稿を終えたい。瑣事になるが、あえて書き残しておく。

博物館で、図書資料を展示する場合、どうしても、二次的、補助的な展示になってしまいがちである。博物館での展示は、立体的な資料、あるいは、希少性が高い美術資料、歴史資料が主なものとなり、図書資料の展示は､それらを補完するものとなる場合が多い。博物館での図書資料だけの展示というのは、なかなか成立しにくいのが現状である。また、来館者にとっても、平面的な図書資料だけが展示されると単調な印象を受けてしまうので、展示方法に多くの工夫が必要となる。このような中で何より大切な

ことは、やはり、どのようなテーマで、展覧会を構成するかである。このことは、図書資料の展示だけに当てはまることではないが、図書資料だけの展示では、特に、魅力的なテーマの設定は重要である。

テーマ設定については、書かれた内容だけからでなく、物としての図書資料が持つ様ざまな特徴や魅力にも、注目して設定することができる。図書資料の形態も、単行本か、文庫本か、新書か、雑誌かなど幾種類もある。また、出版社の種類も様ざまである。一般の出版社か、それも、大出版社か小規模な出版社か、また、地方自治体や博物館・美術館が出版するものもあるが、それらは、一般に書店では扱われず、希少性が高くなる。図版の多いものか、文字中心のものか。これらの特徴に加え、いつの時代のものかなどの要因を足せば、多くの展示のテーマが成立しうる。図書資料の展示に際しては、まず、図書資料を様ざまな面からとらえ、魅力あるテーマで、まとめてゆくことが必要である。

次に、図書資料の展示そのものについてであるが、図書資料を展示する場合、基本的に、一冊の全ページを見ておく必要がある。その図書が、一冊の図書として、どのような全体像を持っているかは、基本的につかんでおく必要がある。したがって、図書の展示の場合、事前の調査には、多くの時間がかかる。原則的にすべてのページを見て、その中から、どのページを展示するか選択するのである。図書資料を展示する場合、展示できるのは、表紙か、裏表紙か（この双方を展示することも可能だが）、見開きの２ページかである。一冊の図書資料で、見ていただきたいページは、多数ある場合があるが、それらを同時に展示することは、物理的に不可能である。むろん、展示できないページを写真パネルにして展示することも、行われていることであるが、やはり、現物の展示にこだわれば、展示できる箇所は限られる。どのページを展示するかは、伝えたいことをしっかりと絞り、そのテーマにしたがって展示することが必要になる。

最後に、「東京」の歴史ということについて。今回の展覧会のテーマは、「東京の20世紀」であり、雑誌に現れた東京の歴史を紹介するものであったが、実は、ここに、一つ難しい問題がある。近代の東京で起こった様ざまな事象は、すべて、東京の歴史になるのであるが、少し粗い言い方をすると、その事象も、日本という国家全体にも関わることと、東京という一地域のみに関係することの二種類に分けられる。たとえば、第二次世界大戦後の東京裁判は、市ヶ谷の旧陸軍士官学校講堂で行われたが、これは、東京の歴史でもあるが、むしろ、日本という国家に関わる歴史的事象である。東京は、日本の首都であるから、このように、東京の出来事であると同時に、日本という国家の出来事である事象は数多くある。今回の展示では、東京という一地域にのみ関わる歴史的事象のみを取り扱おうとした。たとえば、「風俗画報」では、東京の地域を紹介した記事のみを展示した。また、関東大震災を特集した雑誌、東京の先端の様子を紹介した「アサヒグラフ」や「毎日グラフ」、また、東京の町々で発行されたタウン誌などである。これらの雑誌には、東京という一地域の歴史だけが扱われており、地方史としての東京の姿を見ていただけたと思う。しかし、実際に展示したのは、そのような東京地域に関係したものだけでなく、どうしても、日本全体に関わる記事を掲載した雑誌も多く展示せざるを得なかった。日清・日露戦争をあつかった画報や、全国に読者のいた様ざまな芸術雑誌、総合雑誌、また、「青鞜」や「赤い鳥」、戦時下の雑誌や、敗戦後のカストリ雑誌、週刊誌などである。これらの雑誌に掲載された情報は、日本全国にむけて発信された情報で、東京だけに関わるものではない。ただ、これらの雑誌をとりあげたの

は、発刊する集団や会社が東京にあり、東京の出版文化を伝えるものでもあったからである。このように、東京の歴史といっても、東京が、国家の首都であるだけに、日本という国家に関わることもあり、難しい問題が含まれている。

今回の展示では、雑誌をとりあげたが、雑誌だけでなく、一般の図書も、歴史的資料である。書かれた内容も、時代性地域性を有し、印刷や製本など、造本についても時代的な特徴がある。電子出版が、盛んになっていっている現状では、雑誌と同じ状況が、一般の図書についても、いずれは起こり、紙による図書という物自体が、減少していくかもしれない。そのような状況も踏まえ、図書資料の資料性をあらためて認め、その特徴や価値を探り、収集、保存、公開をしてゆくべきであると考える。雑誌のみによる展示を今回行ったが、様ざまな図書資料の展示も可能であろう。事実、文学館や図書館でも、図書の展覧会は様ざまに行われており、今後、そのような展覧会がいっそう多く開催されることを期待する。

なお、本展覧会の開催にあたり、山本晴子様、国立国会図書館、公益財団法人日本近代文学館、合資会社ホトトギス社、新都心新宿ＰＲ委員会、株式会社ぴあの皆様に、ご協力をたまわった。心よりお礼を申し上げたい。

企画展「雑誌にみる東京の20世紀ー館蔵資料紹介ー」

会期：2013年２月９日（土）～ 2013年３月10日（日）　　主催：東京都　東京都江戸東京博物館

№.		資料名	発行所	発行年月日	刊行頻度	定価
プロローグ　雑誌の廃刊						
1	11500180	ぴあ　終刊号　第40巻16号 Pia（Tokyo cultural information magazine）	ぴあ	2011年（平成23）８月18日	隔週刊	680円
2	11500180	ぴあ　創刊号（復刻版）	ぴあ	1972年（昭和47）７月10日	月刊	100円
3	91606020	朝日ジャーナル　第34巻第12号 Asahi Journal	朝日新聞社	1992年（平成４）３月20日	週刊	350円
4	09600762	フォーカス　終刊号　第21巻第31号 Focus	新潮社	2001年（平成13） ８月15・22日	週刊	320円
5	90402181	主婦の友　第59巻第１号 Shufu no tomo（Housewife's companion）	主婦の友社	1975年（昭和50）１月１日	月刊	730円
第１章　明治時代						
風俗画報						
6	94201972	風俗画報　創刊号 Fūzoku gahō （Pictorial magazine of Japanese manners and customs）	東陽堂	1889年（明治22）２月10日	月刊	10銭
7	94201974	風俗画報　第３号	東陽堂	1889年（明治22）４月10日	月刊	10銭
8	94201979	風俗画報　第８号	東陽堂	1889年（明治22）９月10日	月刊	10銭
9	94201991	風俗画報　第20号	東陽堂	1890年（明治23）９月10日	月刊	10銭
10	94201994	風俗画報　第23号	東陽堂	1890年（明治23）12月10日	月刊	10銭
11	94202152	風俗画報　第181号　江戸の華　中編	東陽堂	1899年（明治32）１月25日	月２回刊	12銭
12	94202384	風俗画報　第412号　水害号　上	東陽堂	1910年（明治43）９月５日	月刊	15銭
13	00605001	風俗画報　第337号　小金井名所図会	東陽堂	1906年（明治39）３月25日	月２回刊	［15銭］
14	94202225	風俗画報　第254号　伊豆七島図会	東陽堂	1902年（明治35）８月５日	月２回刊	15銭
15	94202316	風俗画報　第344号　小笠原遊覧図会	東陽堂	1906年（明治39）７月25日	月２回刊	15銭
16	94202102	風俗画報　第131号　新撰東京名所図会　第２編　上野公園之部　下	東陽堂	1896年（明治29）12月20日	月３回刊	10銭
17	94202477	風俗画報　東京近郊名所図会　第５巻　東郊の部　其２	東陽堂	1910年（明治43）８月15日	月２回刊	15銭
18	94202207	風俗画報　第236号　新撰東京名所図会　第31編　京橋区之部　巻之三	東陽堂	1901年（明治34）８月５日	月２回刊	12銭
19	94202212	風俗画報　第241号　新撰東京名所図会　第32編　芝区之部　巻之一	東陽堂	1901年（明治34）11月30日	月２回刊	12銭
20	94202450	風俗画報　終刊号　第478号	東陽堂	1916年（大正５）３月５日	月刊	15銭
日露戦争写真画報						
21	92005011	日清戦争実記　第１編（第10版） Nisshin sensō jikki（True accounts of the Sino-Japanese War）	博文館	1894年（明治27）８月30日	月３回刊	８銭
22	92005040	日清戦争実記　第30編	博文館	1894年（明治27）８月30日	月３回刊	８銭
23	92005098	日露戦争実記　第９編 Nichiro sensō jikki（True accounts of the Russo-Japanese War）	博文館	1904年（明治37）４月18日	月３回刊	10銭
24	92005069	日露戦争写真画報　第９巻（第36編） Nichiro sensō shashin gahō（Photographic magazine of the Russo-Japanese War）	博文館	1904年（明治37）10月15日	月刊	20銭
25	92005077	日露戦争写真画報　第17巻（第58編）	博文館	1905年（明治38）３月８日	月刊	20銭
26	92005088	日露戦争写真画報　第28巻（第82編）	博文館	1905年（明治38）７月20日	月刊	20銭
芸術雑誌						

27	91221302	ホトトギス　第８巻第２号 Hototogisu（"Cuckoo," a literary magazine）	ほとゝぎす発行所	1904年（明治37）11月10日	月刊	15銭
28	91221304	ホトトギス　第８巻第６号	ほとゝぎす発行所	1905年（明治38）３月10日	月刊	15銭
29	91221338	ホトトギス　第12巻第１号	ほとゝぎす発行所	1908年（明治41）10月１日	月刊	20銭
30	91221384	ホトトギス　第15巻第９号	ほとゝぎす発行所	1912年（明治45）６月１日	月刊	20銭
31	87525171	方寸　第１巻第２号（復刻版） Hōsun（"Little ones," a woodblock art and literary magazine）	方寸社（三彩社）	1907年（明治40）６月15日	月刊	20銭
32	87525191	方寸　第３巻第６号（復刻版）	方寸社（三彩社）	1909年（明治42）８月５日	月刊	15銭
33	87525193	方寸　第３巻第８号（復刻版）	方寸社（三彩社）	1909年（明治42）11月10日	月刊	15銭
第２章　大正時代						
大正デモクラシー						
34	90210920	改造　第７巻第５号　普選特輯 Kaizō（Reconstruction）	改造社	1925年（大正14）５月１日	月刊	1円
35	90210940	改造　第９巻第10号	改造社	1927年（昭和2）10月１日	月刊	50銭
36	90210985	中央公論　第41年第６号 Chūō Kōron（Central review）	中央公論社	1926年（大正15）６月１日	月刊	80銭
37	90210989	中央公論　第42年第１号	中央公論社	1927年（昭和２）１月１日	月刊	1円80銭
38	91222603	青鞜　第３巻第３号 Seitō（"Blue Stocking," Japan's first feminist magazine）	青鞜社	1913年（大正２）３月１日	月刊	40銭
39	91222608	青鞜　第３巻第８号	青鞜社	1913年（大正２）８月１日	月刊	30銭
40	91222610	青鞜　第３巻第10号	青鞜社	1913年（大正２）10月１日	月刊	25銭
41	91222612	青鞜　第４巻第２号	青鞜社	1914年（大正３）２月１日	月刊	25銭
42	91222619	青鞜　第５巻第１号	青鞜社	1915年（大正４）１月１日	月刊	40銭
43	92201788	赤い鳥　創刊号（復刻版） Akai tori（"Red bird," children's literary magazine）	赤い鳥社 （日本近代文学館）	1918年（大正７）７月１日	月刊	18銭
44	92201791	赤い鳥　第１巻第４号（復刻版）	赤い鳥社 （日本近代文学館）	1918年（大正７）10月１日	月刊	18銭
45	92201792	赤い鳥　第１巻第５号（復刻版）	赤い鳥社 （日本近代文学館）	1918年（大正７）11月１日	月刊	18銭
46	92201811	赤い鳥　第５巻第１号（復刻版）	赤い鳥社 （日本近代文学館）	1920年（大正９）７月１日	月刊	30銭
関東大震災						
47	94003471	アサヒグラフ特別編 Asahi Graph	朝日新聞社	1923年（大正12）10月28日		1円
48	87511003	改造　第５巻第10号 Kaizō（Reconstruction）	改造社	1923年（大正12）10月１日	月刊	80銭
49	90211020	キネマ旬報　第144号 Kinema junpō（film magazine）	キネマ旬報社	1923年（大正12）11月21日	旬刊	30銭
50	92005007	サンデー毎日　第２年　第41号 Sunday mainichi（weekly magazine）	大阪毎日新聞社	1923年（大正12）９月23日	週刊	10銭
51	88139301	実業之日本　第26巻第19号 Jitsugyō no Nihon（Business Japan）	実業之日本社	1923年（大正12）11月１日	月２回	50銭
52	11604570	主婦之友　第７巻第10号 Shufu no tomo（Housewife's companion）	主婦之友社	1923年（大正12）10月１日	月刊	60銭
53	87512117	少女の友　十月　第16巻第10号 Shōjo no tomo（Girl's companion）	実業之日本社	1923年（大正12）10月５日	月刊	40銭
54	89212067	文化画報　第１巻第２号　大震災画報 Bunka gahō（Pictorial culture magazine）	文化研究会	1923年（大正12）10月10日	月刊	1円
55	90210887	文芸春秋　第1年第11号 Bungei shunjū（"Literary spring and autumn," a literary magazine）	文藝春秋社	1923年（大正12）11月１日	月刊	25銭

56	89002177	震災画報　全 Shinsai gahō（Pictorial magazine of the earthquake）	半狂堂	1924年（大正13）２月１日	［月２回刊］	2円20銭
57	89002374	太陽　第29巻第12号 Taiyō（The sun）	博文館	1923年（大正12）10月１日	月刊	80銭
第３章　昭和・平成時代						
戦時下の雑誌						
58	91221424	キング改題富士　第39巻第３号 "King" under new title of "Fuji"	大日本講談社雄弁会	1943年（昭和18）３月１日	月刊	45銭
59	91213265	ショーネン・センキ　第３巻更生第２号 Shōnen senki（Boys' Battle Flag）	戦旗社	1931年（昭和６）８月１日	［月刊］	5銭
60	89206804	ナップ　創刊号 NAPF（Nippona Artista Proleta Federacio）	戦旗社	1930年（昭和５）９月７日	月刊	30銭
61	01604180	働く婦人　創刊号 Hataraku fujin（Working women）	日本プロレタリア文化聯盟	1932年（昭和７）１月１日	月刊	25銭
62	94204083	プロレタリア文学　創刊号 Proletarian Literature	日本プロレタリア作家同盟	1932年（昭和７）１月１日	月刊	35銭
63	95002119	週報　375号 Shūhō（Weekly bulletin）	印刷局	1943年（昭和18）12月22日	週刊	5銭
64	91285039	週報　410号	印刷局	1944年（昭和19）８月30日	週刊	5銭
65	88022237	写真週報　創刊号 Shashin shūhō（Weekly photography bulletin）	内閣情報部	1938年（昭和13）２月16日	週刊	10銭
66	88022263	写真週報　第29号	内閣情報部	1938年（昭和13）８月31日	週刊	10銭
67	88022425	写真週報　第218号	内閣印刷局	1942年（昭和17）４月29日	週刊	10銭
68	88022463	写真週報　第292号	内閣印刷局	1943年（昭和18）10月６日	週刊	10銭
69	88022486	写真週報　第315号	印刷局	1944年（昭和19）４月５日	週刊	10銭
70	88022487	写真週報　第316号	印刷局	1944年（昭和19）４月12日	週刊	10銭
71	88022496	写真週報　第325号	印刷局	1944年（昭和19）６月14日	週刊	10銭
72	90603464	FRONT　第３期特別号戦時下の東京号（復刻版）	東方社（平凡社）	1945年（昭和20）		
カストリ雑誌						
73	90600303	りべらる　第１巻第２号 Liberal	太虚堂書房	1946年（昭和21）３月１日	月刊	2円
74	90600309	りべらる　第１巻第９号	太虚堂書房	1946年（昭和21）11月１日	月刊	6円
75	90600460	猟奇　創刊号 Ryōki（Bizarre literature）	茜書房	1946年（昭和21）10月15日	月刊	20円
76	90600462	猟奇　昭22.秋季読物号	文芸市場社	1947年（昭和22）10月15日	［隔月刊］	35円
77	90600480	OK（オーケー）第３号	創世社	1948年（昭和23）２月15日	月刊	25円
78	90600457	アベック　第２巻第２号 Avec	アベック社	1949年（昭和24）２月５日	月刊	45円
79	90600410	オール不夜城　創刊号 Ōru fuyajō（All nightless city）	光楽書房	1948年（昭和23）６月８日	［月刊］	30円
80	90600549	性文化　3 Sei bunka（Sex culture）	畝傍書房	1947年（昭和22）11月20日		20円
81	90600552	性文化　8	うねび出版部	1949年（昭和24）７月20日		45円
グラフ雑誌						
82	91600674	毎日グラフ　別冊 Mainichi graph	毎日新聞社	1951年（昭和26）９月25日	週刊	130円
83	05604864	毎日グラフ　第17年第46号	毎日新聞社	1964年（昭和39）11月１日	週刊	100円
84	88400507	毎日グラフ　第17年第47号	毎日新聞社	1964年（昭和39）11月３日	週刊	250円
85	87526009	毎日グラフ　第30巻第34号	毎日新聞社	1977年（昭和52）８月21日	週刊	400円
86	91600639	アサヒグラフ　通巻1265号 Asashi graph	朝日新聞社	1948年（昭和23）12月１日	週刊	25円
87	93400746	アサヒグラフ　通巻1720号	朝日新聞社	1957年（昭和32）８月４日	週刊	50円

88	93400938	アサヒグラフ　通巻1936号	朝日新聞社	1961年（昭和36）８月４日	週刊	70円
89	93401038	アサヒグラフ　通巻2050号	朝日新聞社	1963年（昭和38）９月13日	週刊	80円
90	93401136	アサヒグラフ　通巻2198号	朝日新聞社	1966年（昭和41）５月13日	週刊	100円
91	93401180	アサヒグラフ　通巻2251号	朝日新聞社	1967年（昭和42）４月28日	週刊	100円
92	93401343	アサヒグラフ　通巻2426号	朝日新聞社	1970年（昭和45）６月26日	週刊	150円
93	93401351	アサヒグラフ　通巻2434号	朝日新聞社	1970年（昭和45）８月21日	週刊	180円
		週刊誌				
94	96600151	週刊朝日　第94巻第２号 Shūkan Asahi（Weekly Asahi）	朝日新聞社	1989年（平成１）１月20日	週刊	240円
95	96600424	週刊新潮　第34巻第３号 Weekly Shinchō（weekly magazine）	新潮社	1989年（平成１）１月19日	週刊	220円
96	96600351	週刊文春　第31巻第４号 Shūkan Bunshun（Weekly magazine）	文芸春秋	1989年（平成１）１月19日	週刊	220円
97	96600456	週刊アサヒ芸能　第44巻第３号 Shūkan Asahi geinō（Weekly Asahi entertainment）	徳間書店	1989年（平成１）１月19日	週刊	280円
98	96600287	週刊女性　第33巻第４号 Shūkan Josei（Weekly women）	主婦と生活社	1989年（平成１）１月31日	週刊	240円
99	96600249	週刊スパ!　第38巻第４号 Shūkan SPA ！（weekly magazine）	扶桑社	1989年（平成１）１月19日	週刊	250円
		タウン誌				
100	02600961	銀座百点　創刊号 Ginza hyakuten（"Ginza 100%," local town information magazine）	銀座百店会	1955年（昭和30）１月１日	月刊	50円
101	02600966	銀座百点　NO.6	銀座百店会	1955年（昭和30）６月１日	月刊	50円
102	02600967	銀座百点　NO.7	銀座百店会	1955年（昭和30）７月１日	月刊	50円
103	02600985	銀座百点　NO.25	銀座百店会	1957年（昭和32）１月１日	月刊	50円
104	02600987	銀座百点　NO.27	銀座百店会	1957年（昭和32）３月１日	月刊	50円
105	87521096	銀座百点　NO.92	銀座百店会	1962年（昭和37）８月１日	月刊	50円
106	88500193	谷中・根津・千駄木　地域雑誌　其の５ Yanaka/Nezu/Sendagi local magazine	谷根千工房	1985年（昭和60）９月15日	季刊	250円
107	89607072	谷中・根津・千駄木　地域雑誌　其の16	谷根千工房	1988年（昭和63）７月10日	季刊	300円
108	92501814	谷中・根津・千駄木　地域雑誌　其の32	谷根千工房	1992年（平成４）７月15日	季刊	350円
109	96500968	谷中・根津・千駄木　地域雑誌　其の47	谷根千工房	1996年（平成８）７月28日	季刊	400円
110	02500700	谷中・根津・千駄木　地域雑誌　其の71	谷根千工房	2002年（平成14）10月25日	季刊	５00円
111	09500307	谷中・根津・千駄木　地域雑誌　其の94	谷根千工房	2009年（平成21）８月20日	季刊	525円
112	87520059	浅草　創刊号 Asakusa（local town information magazine）	東京宣商出版部	1970年（昭和45）４月１日	月刊	60円
113	88500194	ステップ・イン新宿　創刊号 Step-in Shinjuku（local town information magazine）	新都心新宿PR委員会	1975年（昭和50）10月10日	月刊	100円
114	90405504	光が丘　通巻第40号 Hikarigaoka（local town information magazine）	協同クリエイティブ	1987年（昭和62）４月１日	月刊	200円
115	90405629	うえの　NO.375 Ueno（local town information magazine）	上野のれん会	1990年（平成２）７月１日	月刊	150円
116	93600970	武蔵野から　第２世紀第31号 Musashino kara（"From Musashino," a local town information magazine）	武蔵野から編集室	1992年（平成４）５月	隔月刊	100円
		トピックス　生きている雑誌				
117	11604572	主婦の友　第11巻第12号 Shufu no tomo（Housewife's companion）	主婦の友社	1927年（昭和２）12月１日	月刊	50銭
118	93201489	主婦の友　第15巻第４号付録　毎日のお惣菜	主婦の友社	1932年（昭和７）１月１日	月刊	
119	87512075	主婦之友　第25巻第12号	主婦之友社	1941年（昭和16）12月１日	月刊	50銭
120	98604357	主婦之友　第27巻第12号	主婦之友社	1943年（昭和18）12月１日	月刊	40銭

121	87512087	主婦之友　第29巻第４号	主婦之友社	1945年（昭和20）４月１日	月刊	40銭
122	94000023	主婦之友　第29巻第７号	主婦之友社	1945年（昭和20）７月１日	月刊	40銭
123	98604364	主婦之友　第29巻第９号	主婦の友社	1945年（昭和20）10月１日	月刊	80銭
124	90402180	主婦の友　第58巻第２号	主婦の友社	1974年（昭和49）２月１日	月刊	460円
トピックス　創刊号						
125	10600868	週刊女性セブン　創刊号 Shūkan josei sebun（Weekly Women's Seven）	小学館	1963年（昭和38）５月５日	週刊	50円
126	10601067	週刊平凡パンチ　創刊号 Shūkan Heibon punch（Weekly Heibon punch）	平凡出版	1964年（昭和39）５月11日	週刊	50円
127	10601286	旅の手帖　創刊号 Tabi no techō（Handbook to travels）	ベースボール・マガジン社	1965年（昭和40）２月１日	月刊	200円
128	10601196	月刊天文ガイド　創刊号 Gekkan tenmon gaido（Monthly guide to astronomy）	誠文堂新光社	1965年（昭和40）６月５日	月刊	100円
129	10601275	宝石　創刊号 Hōseki（Gems）	光文社	1965年（昭和40）10月１日	月刊	130円
130	10600851	週刊スポーツマガジン　創刊号 Weekly Sports Magazine	ベースボール・マガジン社	1966年（昭和41）３月18日	週刊	50円
131	10600843	サッカーマガジン　創刊号 Soccer Magazine	ベースボール・マガジン社	1966年（昭和41）６月１日	月刊	150円
132	89602893	プレイボーイ　創刊号 Playboy	集英社	1966年（昭和41）11月15日	週刊	60円
133	10601020	週刊漫画アクション　創刊号 Shūkan Manga akushon（Weekly Manga action）	双葉社	1967年（昭和42）８月10日	週刊	60円
134	89602834	海　発刊記念 Umi（Sea）	中央公論社	1969年（昭和44）６月１日	月刊	220円
135	10601074	諸君！　創刊号 Shokun!（Ladies and gentlemen!）	文藝春秋社	1969年（昭和44）７月１日	月刊	200円
136	10601065	週刊ポスト　創刊号 Weekly Post	小学館	1969年（昭和44）８月22日	週刊	70円
137	10600861	アニマ　創刊号 Anima	平凡社	1973年（昭和48）３月15日	月刊	［350円］
138	10601135	終末から　創刊号 Shūmatsu kara（From the end）	筑摩書房	1973年（昭和48）６月30日	隔月刊	380円
139	10600897	GORO　創刊号	小学館	1974年（昭和49）２月20日	隔週刊	250円
140	04603172	野性時代　創刊号 Yasei jidai（Wild Age）	角川書店	1974年（昭和49）５月１日	月刊	500円
141	04601895	週刊テレビファン　創刊号 Shūkan terebi fan（Weekly TV fan）	共同通信社	1974年（昭和49）９月６日	週刊	130円
142	04603312	ポパイ　創刊号 Popeye	平凡出版	1976年（昭和51）８月１日	月刊	780円
143	04601974	わたしの健康　創刊号 Watashi no kenkō（My Health）	主婦の友社	1976年（昭和51）10月１日	月刊	390円